

未来^眼とうほく 第24回

若い力で新しい田園都市モデルを造る

2005年10月に（旧）横手市と5町2村が合併し、新たな横手市が誕生し11年目を迎えた。人口は、94,330人（平成28年2月）と秋田県内では秋田市に次ぐ人口第2位の都市である。

肥沃な大地と昼夜の温度差が大きい盆地特有の内陸性気候は、さまざまな農作物の生産に適しており、米、りんごなどの果物、野菜の生産量は秋田県内有数である。また、ホップは全国有数の生産量を誇っている。

製造業としては、自動車関連産業のほか、電子部品、電子デバイス産業も集積している。

旧横手市内は城下町の風情が残り、また江戸時代以来の内蔵をもつ建物群のある増田地区は、国の重要伝統的建造物群保存地区に認定されている。さらに、450年の伝統をもつ「かまくら」と「ぼんてん」奉納をメインとする横手雪まつりなどの民俗文化が残るなど、多様な歴史、文化に恵まれている。

高橋市長は、2013年10月に就任し、秋田県では最若手の市長である。横手市においても人口減少、少子高齢化、農業の後継者不在などの問題が進行しているが、こうした流れに終止符をうち、永続的に成長可能な地域社会

を創造するため、「若い世代の挑戦を応援する市政」を所信として掲げている。そして、横手市まち・ひと・しごと創生総合戦略では、「働く場が充実し元気に暮らし続けられるまち」、「子供を産み育て笑顔で住み続けられるまち」を横手市の目指す姿としている。また、いろいろなアイデアをもち、就任以来、企業誘致にも積極的に取り組まれ実績をあげられている。

若い力で横手市の課題にどのように取り組んでいくかなど幅広くお話をお伺いした。

最若手の市長として

●町田 2013年に市長に就任され、現在でも秋田県内の市長として最若手でいらっしゃいますが、どのような動機で政治の世界に入られたのでしょうか。

●高橋 28歳で故郷の（旧）十文字町の町議会議員になりました。当時、市町村合併を巡り十文字町でもいろいろな議論があり、その時、私は東京で働いていましたが、十文字町の行方が大変気になっておりました。また、いずれは故郷に戻り政治の道ということも考えていましたので、ここで一步を踏みださなければ、政治を志す素質はないと考え、思いきってサラリーマンを辞め政治の道に入ったということです。

合併により（新）横手市が発足し、市議会議員となりました。いろいろ勉強していくうちに、横手がかかえる問題は日本がかかえる問題そのものであり、常識的なアプローチでは突破口は開けないと考えるようになりました。そこで、リーダーとして横手を引っ張っていききたいという思いで市長選に立候補し、当選させていただいて今に至っています。

●町田 市長として、横手をどのような地域にされるのかいろいろな思いがありますが。

●高橋 日本がかかえる問題の先進地が秋田であり、ここ横手でいい変化を起こせば、日本全体の処方せんになるのではないかという意気込みでやっています。

●町田 8市町村が合併してできたわけですので、まとめていくのは大変だと思いますが、横手というユニティ（結束感）はできてきているのでしょうか。

●高橋 正直なところ道半ばというところですが、一つの横手市という枠組みで行政は進んでいますが、各地域で旧市町村の枠組みが残っている面があります。わたしも選挙のスローガンで「地域に元気を、横手を一つに」ということを掲げましたが、地域間の心の垣根を少しずつ引き下げていきたいと思っています。

学校の統廃合に伴い、一つの学校にいろいろな地域から児童、生徒が通うようになっていますので、子どもたちには自然に“横手”という意識ができてくるとおもいます。

横手として誇れるもの、ワァーと盛り上がるものを積み上げていく必要がありますが、ある程度の時間は必要と考えています。

新しい田園都市モデルを造る

●町田 横手の産業のベースは農業ですが、市長は率先して企業誘致にもあたられ、成果をあげておられると伺っています。農業と製造業で横手を活性化させていくという戦略かと拝察しますが、現状はいかがでしょうか。

●高橋 基幹産業はやはり農業でこれからもそうです。スケールメリットを追求するものと高付加価値化を追求するものの組み合わせが重要ですが、横手ではそれが可能だと思っています。

新しい産業の発展のためには働き手の確保が必要です。農家で家業を継がない人は、勤める場所が近くにあれば働きにでることが出来ます。高度成長期には地方の農村部の人々が京浜などの工業地帯へダイナミックに動いたわけですが、この動きを横手内部で再現できれば、農業、製造業、商業、サービス業のバランスのとれた田園都市となる事が出来ます。そういう理想を実現させていきたいと考えています。

●町田 農業の6次産業化がいわれていますが、農家すなわち個人事業主という図式を変え、みんなで共同して大規模な組織を作ることが必要ではないでしょうか。土地を現物出資し配当を得るようにすれば、農業の担い手が減っていくことにも対応できます。

そのためには市長も力をいれておられる、海外を含めた販路開拓、新しい商品の開発などマーケティングがより大切になります。横手は大変活気があると伺っていますので、大いに期待しております。

●高橋 強いリーダーシップを持っている方がいる地区では、集落営農であったり、農事組合法人ができたりして、大規模化が進んでいます。一方で、農地を借り

ても米価が低くなったために経済的に合わないという問題もあります。

このような問題の解決のためにも、農業にはイノベーションが必要です。現在でも数十年前に比べれば飛躍的に進歩していますが、今後ITの活用が本格化すれば、自動運転のトラクター、田植機などの導入によって担い手不足や、コストの問題も軽減されるのではと思います。

●町田 おっしゃる通りだと思います。大学の工学部も農業に関心をもち、熱心に取り組むようになっていきます。

横手には植物工場もあります。先駆者としていろいろ大変かと思いますが、長期的には植物工場というのも、市長の今のお話のさきがけという気がします。

●高橋 先駆者の皆さんは、先行投資にともなう資金、技術開発などの問題で大変ご苦労されているわけですが、着実にそういうことにチャレンジされている方がいらっしゃいます。それに続く方が出てきてコストが下がっていくと思いますので、先駆者の方には期待するところが大きいのです。

世代を超えて力を集め地方創生

●町田 地方創生への取り組みでは、今までお話いただいたことも含めまして、特にどのようなところに力を入れられるお考えでしょうか。



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行に入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、荘内銀行取締役副頭取（1994年就任）、取締役頭取（95年就任）、取締役会議長（2008年就任）を歴任。09年10月よりフィデアホールディングス取締役会議長、北都銀行取締役会長、11年6月より荘内銀行取締役相談役、12年6月よりフィデア総合研究所理事長をそれぞれ務めている。12年4月より2年間、東北公益文科大学の学長を務め、14年10月に同大名誉教授の称号を授けられた。



高橋 大（たかはし・だい）

1976年3月秋田県十文字町（現横手市）生まれ。秋田経済法科大学（現ノースアジア大学）卒業。2004年十文字町議会議員。2005年横手市（合併後）議会議員。2013年10月横手市長に就任。



食育を含めた子どもの地域教育に力を入れています
(写真提供：横手市役所)

●高橋 「雇用の創出」と「子どもを産み育てやすい横手」の2点に注力して、すでに取り組んでいます。当市では、国が地方創生戦略を打ち出す前に、取り組みをはじめました。「老若男女総動員」ということを市長選挙の際にも言っていたのですが、国も「一億総活躍」ということで同じように考えていたということになります。

●町田 人口減少が進み、働き手が少なくなってきていますので、女性も高齢者も元気で活躍する、最近のはやりの言葉でいうとダイバーシティということですが、これが時代のキーワードかもしれません。

●高橋 65歳以上は高齢者ということですが、個々人で相当に違いがあり、年齢に比べ体力的に若い方もたくさんいます。福祉とのバランスもありますが、そういう方には大いに活躍していただきたいと思います。

●町田 これからは、独立自尊といいますが、自分たちの地域は自分たちで守るのだというふうに変えていかなくてははいけないと思います。

●高橋 行政サービスには、福祉は特にそうですが、もともと独立自尊というものが前提にあると思います。自由、権利と義務、責任との均衡が大切なのではないのでしょうか。

●町田 地方創生には住民の意識改革が重要です。横手は北都銀行発祥の地でもあるわけで、わたくしどもも頑張らなくてはという強い思いがありますが、金融機関を含めた民間、また、秋田大学横手分校のような大学など、行政だけに頼るのではなく、「産官学金労言」が地域のために連携することが必要です。

●高橋 上から目線の啓蒙では駄目で、いろいろな媒体を巻きこんで、折りに触れて訴えていかなくてはと思います。

小学校の段階から子どもたちにもそういった意識を学んでもらい、秋田大学横手分校などとも連携し、進化させていくことが非常に大事だと思います。

他地域と連携した観光振興

●町田 秋田は、観光資源が豊富だと思いますが、必ずしもそれを活かして産業に上げていない印象を持っています。横手には、増田地区の伝統的建造物群や「かまくら」など観光の素材は豊富だと思います。地方創生においても観光は重要な要素ですが、観光振興をどのように図っていかれるのでしょうか。

●高橋 秋田県は、距離というより、交通アクセスが悪い点で、観光において劣位にあります。国内で観光地に行きつきた人が最後に訪れるというイメージがあります。その中で横手は、県のゴールデンルートである「田沢湖・角館・男鹿」からも外れています。国内、インバウンド観光客とも全体からみれば訪問客数はごく少数です。

まず、横手に来てもらえるようにメディアを含めて発信を強化することが必要です。観光からビジネスが生まれれば、住民の意識も変わり自律的に回転していくと思います。

●町田 インバウンドが2,000万人になったといっても観光産業全体に占める割合はまだ少ないわけですが、インパクトは大きいので、今後、どこの国をターゲットとするかも重要だと思います。

また、旅の期間を長くするような観光を目指すべきです。そのためには受け入れ体制の整備が大切ですが、例えば民泊についてはどのようにお考えでしょうか。

●高橋 千葉の明海大学は、留学生が多いのですが、毎年留学生の方々に来ていただき、民家に泊まってもらうということを続けています。市としても宿泊可能な民家を把握しています。現在はボランティアですが、ボランティアとビジネスの組み合わせも考えられます。

●町田 増田の蔵の町も民泊としてなじむと思います。観光客が長期滞在するようになれば、元気なシニアに地方で活躍してもらう日本版CCRC（生涯活躍のまち）にもつながっていくのではないのでしょうか。

また、夏まつりで近隣地域を巻き込めば、長い期間観光客を呼び込むことができます。大曲の花火も宿泊場所の確保が大変ですし、民泊などで地域が連携していくことが大切ではないかと思っています。

●高橋 観光客にとって行政区分は何の意味もありません。それぞれの地域が持つ魅力を点から線に、そし

て面に広げていくことが大事です。

まず、横手は酒どころですので、観光客には腰を据えて飲んでもらい、その日は他へは行かず泊まってもらうなど、細かい工夫も必要です。

さらに、祭りや行事にしても他と同じ日にということではなく、日程を調整しながら観光客の長期逗留を目指す必要があります。一地域単独では長期に逗留させることはできません。

●町田 日本酒も海外に展開しつつありますが、やはり日本食とセットでなければその魅力は伝わらないのではないのでしょうか。

●高橋 ふるさと納税に力を入れています、お礼として日本酒と日本食材のセットというのもいいと思います。

横手は南秋田の観光ハブとして良い位置にあります。横手として出しゃばらずに、謙虚にバランスをとりながら他の地域と一体になって魅力を発信し、観光の広域化を進めていきたいと考えています。

●町田 湯沢も横手と共通するところがあり、広域化すればかえってそれぞれの魅力が浮き立つのではないのでしょうか。ぜひ連携を深めていただければと思います。

市部と農村部の均衡ある発展を

●町田 話は変わりますが、人口が減少するなかで公共インフラの老朽化、更新が問題となっています。例えば水道管は耐用年数が40年といわれていますし、道路、橋梁も高度成長期に整備されたものが更新期に入っています。多額の更新費用が必要ですが国・地方とも財政が厳しい状況で、まちづくりにもいろいろな影響があると思います。

●高橋 当市では都市計画、水道ビジョンなどを策定し状況に応じて見直ししながら、更新を含めたインフラ整備、まちづくりを進めています。

水道に関しては、横手市の水道管路の延長は約1,000kmあります。更新時には、耐震化とあわせ長い期間使用できるようにしています。また、積雪寒冷地ですので、深く埋設するようにしています。水道事業は公営企業として黒字となるように運営しなくてはなりませんので、その制約の中でコストの低減、更新期間の延長など工夫をしながら整備を進めています。

一方、都市計画では住居がむやみに周辺に広がっていかないように規制しています。コンパクトシティという周辺部の切り捨てという誤解がありますが、

そうではなく「市部と農村部の均衡」ということが大切です。以前のように補助金のみで下水道のような公共インフラをどんどん広げることができません。ある程度は、住民の皆さんに我慢をしていただく部分もできます。

●町田 もはや国の財政に頼れないなかで、田園都市型コンパクトシティで、周辺部は交通インフラの整備でカバーしていくようなことを考えていかざるをえないのではないのでしょうか。

●高橋 農村部が取り残されたという意識が住民の皆さんに生じないようにと考えていますが、一方で、農村部の暮らしの良さを住民の皆さんには見直していただきたいと思います。8~10LDKの家、2台以上の車庫、家庭菜園や農園付きといった暮らしは、大都会では超富豪でなければ手に入られませんので、実は贅沢な暮らしといえます。都会的發展と農村的發展とは違うということを、住民の方に分かっていただけのようにしないと、コンパクトシティとして集約していくという方向には動かないと思います。

●町田 地方にはコミュニティもあり、大都会でのストレスの多い暮らしより、見方を変えれば過ごしやすいのではないのでしょうか。若い人達、特に30歳代の方々はそのことにうすうす気づいてきていると思います。

●高橋 影響力のある人がしっかりそれを伝えてほしいと思います。家庭でも子どもに地元の良さをよく伝えていくことが大切だと考えています。子どもたちには特に期待をしていますので。

●町田 市長のお話には若いエネルギーを強く感じました。本日は、お忙しいなかいろいろとお伺いすることができ大変ありがとうございました。



男鹿市の「なまはげ」とコラボした『出前かまくら』
(写真提供：横手市役所)